

令和7年度 第1回  
松本市・山形村・朝日村中学校組合  
総合教育会議議事録

松本市・山形村・朝日村中学校組合教育委員会

# 令和7年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議

日時 令和7年12月19日（金）  
午後1時30分から午後3時  
会場 松本市役所 第一応接室

## 次 第

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 懇談項目  
未来の鉢盛中学校を見据えた地域連携のあり方について
- 4 閉 会

◎懇談項目

○事務局長（赤羽志穂） 定刻となりましたので、ただいまから令和7年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を開催いたします。

意見交換に入るまでの間、進行を務めます松本市教育委員会教育次長の赤羽志穂でございます。よろしくお願いいたします。

なお、本日の会議は公開とし、お手元の次第により進行いたします。

初めに、この会議を主催する臥雲管理者からご挨拶をお願いいたします。

○管理者（臥雲義尚） 年末のお忙しい中、教育長はじめ教育委員の皆様、そして藤松校長には、今年度の総合教育会議にご出席をいただき感謝を申し上げます。そして、皆様方には、日頃からこの中学校組合の教育行政の推進にご支援、ご協力をいただいておりますことに改めて御礼を申し上げます。

鉢盛中学校は今年度、創立60周年を迎えました。1市2村の先人の皆様方が地域の未来を共に描いて、そして力を合わせて設立した学校でございます。リンゴの摘果作業に象徴されますように、非常に学校と地域が深く結びついてきた歴史がございます。

今日の総合教育会議のテーマとして、「未来の鉢盛中学校を見据えた地域連携のあり方について」ということにさせていただきました。藤松学校長、そして西山コミュニティスクール統括コーディネーター、松本大学地域づくり考房「ゆめ」の三澤専門員から、鉢盛中学校における地域連携の現状と課題についてご説明をいただき、その後、意見交換をお願いしたいと思います。それぞれの立場から、形式にとらわれず、課題やあるべき姿を共有して、自由闊達な意見交換ができればと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局長（赤羽志穂） 続きまして、曾根原教育長からご挨拶をお願いいたします。

○教育長（曾根原好彦） 皆さん、こんにちは。

地域と共にある学校づくりというのは、日本全国の学校の課題であります。学校には、多様なお子さんがたくさん集うようになり、一斉一律に教師が授業を行うものでは立ち行かなくなっています。それから、子供たちが学校の外へ出て学ぶ探求、総合的な学習の時間がとても充実してきており、そこにずっと住んでいるわけでもない教員だけでは指導ができず、地域の力を貸してほしいというふうに願っております。

コロナ禍で学校と地域との連携が一旦崩れました。ですから、それまで地域とつながっている経験をしていた先生がコロナの間に転任してしまい、異動してしまい、新しい先生はその地域での連携の仕方が分からない。したがって、どうやって地域と手を携えればよいのか分からないという学校もある。地域も、学校は敷居が高くてなかなか近づけない、そんなような状況であります。

そんな中、鉢盛中学校では地域連携が進んでいるというお話をお聞きし、今日は鉢盛中の生徒の皆さんのためにどんな鉢盛としての地域と共にある学校がつかれるかを皆さんと共に論じることができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局長（赤羽志穂） これより議事に入ります。

本日は、「未来の鉢盛中学校を見据えた地域連携のあり方について」をテーマに、鉢盛中学校における地域連携の現状を藤松校長先生から説明し、続いて、西山コーディネーター、三澤専門員から地域連携の取組状況についてご報告いたします。

それでは、藤松学校長から説明をお願いいたします。

○学校長（藤松隆雄） 改めまして、こんにちは。

鉢盛中学校校長の藤松でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

以後、着座にて失礼をさせていただきます。

先ほど来お話がございましたように、本校ではその学校の成り立ちから、地域との連携というものは大変密接でございます。未来の学校というものを見据えたときに、この地域連携をより進めていくことが鉢盛中学校の未来であるという視点から、本日はこのようなテーマで皆さんにご意見をいただきたく、お話をさせていただきます。

まず、組合立という本校の強みがあります。それは、まず資料をご覧くださいと分かると思うのですが、本校の生徒が地域のために何かしてみたいという、これは学力・学習状況調査でございますけれども、これは一番上ですけれども、非常に高い数値が、毎年これぐらい高い数値が出ております。子供たちにそういう意識があるということ、そして組合立という特殊性から、今、隣に座っている西山のようなコミュニティスクール統括コーディネーターが常勤をして、学校と地域をつなぐ強力な窓口となっているという点、そして何よりも3つの行政を学区に持つ本校は、多様で豊富な地域資源（ひと・もの・こと）があるということ、この3つを生かして地域連携を進めているところでございます。

ご覧をいただいているものは、現在行っている地域連携の主なものであります。総合的な学習の時間、ボランティア、生徒会、部活動、また授業等、これだけではなくて、もっとたくさん関わっていただいているわけですが、主なものを挙げるとこのような形。恐らく、いろいろな学校を私も回っておりますけれども、これだけ地域と密接に様々なことを結びつけて活動している学校は少ないかなというふうに思っております。

本校では、総合的な学習の時間を中心に、ちなみにこれは後でまたご説明させていただきますが、総合的な学習の時間を白峰タイムというふうに呼んで、かなりいろいろな分野で地域の方にご協力をいただいているものでございます。

本校は、総合的な学習の時間を使って主に地域連携をしておりますけれども、目標として3つを挙げています。地域の人々の生き様に触れるということです。これを通して、社会に参画していこうとする態度やコミュニケーション能力を養う。表現力の育成、体験を通して学んだことを表現、発信する力を身につける。その上で、地域の魅力を発掘したり、自ら見

いだした課題を解決しようとするを通して、地域を愛する心、郷土愛を育んでいくという点でございます。

これは、白峰タイムに取り組んだ生徒たちの声の抽出でございますけれども、例えば朝日太鼓に取り組んでいるお子さんたちは、地域の方々の熱意に触れて、私たちも太鼓を続けていかななくてはならないという。今写真に写っているのは、実はアイシティ21、井上の副社長さんでございます。中学生がそういう立場の方に直接アプローチをかける、めったにないことだと思うんですが、そういったことを通して表現力を高める。

そして、一番下は、地域の方とガチャという、この後お見せしますけれども、つくっていく中で、地元農産物や魅力に気づいていくという、郷土愛を感じていくという過程、子供たちの声であります。我々が目指している姿に、地域の方々のご協力を通して近づいているという姿ではないかなというふうに思っています。

今日はいろいろな視点からお言葉をいただきたいわけですが、私が現在考えている学校の将来像、未来像、学校が地域に求めたいこと、幾つかあるわけですが、こんなところを今考えています。学校のコミュニティスペース化ということです。本校、残念なことに学級数がどんどん減少して、空き教室等がいっぱいあるという状況です。こういった学校という施設をより有効に活用することはできないかということをお考えしているところであります。

ちなみに、今写真に写っているものは、今年度からの活用事例として、地元の囲碁クラブの方に来ていただいて、月2回、CSはちもりルームというのがあるんですが、そちらのほうで囲碁をやっていただいています。行く行くは、こういったところに子供たちが顔を出したり、こういったところが集まっている人々が学校の中にどんどん入っていく、そんな姿が理想の一つなのかなというふうに思っています。

2つ目は、立場や役割が変わりながらも時を超えて活動や思いが受け継がれていくということでもあります。現在のような学校と地域の互恵的な関わりを継続していくために、学校は、また地域はどうあったらよいかということをお皆さんからご意見いただくとありがたいなというふうに思っています。私は、中学校の段階までに、できるだけ地域と関わり、よい地域の思い出をたくさんつくることが大事だと思っています。そういった体験をした子供たちが成長したときに、今度私たちの番であると、そうやってつながっていくといいなというふうに思っております。

私からは以上であります。

続いて、CSはちもり統括コーディネーター、西山のほうからご説明をさせていただきますので、お願いいたします。

○コーディネーター（西山真由子） 皆さん、こんにちは。

鉢盛中学校で、CSはちもり、コミュニティスクールはちもり統括コーディネーターをしております西山真由子と申します。本日はよろしくお願い申し上げます。

私も着座にて失礼いたします。

地域側から見た連携、課題についてということでちょっとお話しさせていただきます。

先ほど校長からお話があった、様々な地域連携の調整をふだん私、担当のほうでさせていただいていますが、その中の1つ、3年生の総合的な学習の時間、白峰タイムというふうに呼ばれておりますが、それについてちょっと簡単に説明させていただきます。

地域を盛り上げたいとか貢献したいと思っている生徒たちは物すごく多いのですが、その生徒たちのために地域の方のご協力を得ながら、体験的な活動を中心とした講座を展開しております。その講座の中から1つだけ選択をして探求を進めていくというような位置づけになっております。大きな特徴は、全ての講座で地域の方が関わって一緒に活動を進めていくということになるかと思えます。

今年度は、今画面に出ている5つと、ほかにも2つあり、全部で7つの講座を実施しております。今画面に出ている1、2、3、4番までが、内容は少し変わりますが、毎年必ず講座になっているものです。

5番目の国際交流というのは、3年生の総合的な学習の時間ではなくて、2年生の総合的な学習の時間で職場体験をしているのですが、そのときに、駒ヶ根にあるJICA駒ヶ根に体験講習に行っておりまして、それをやっているという一環から、3年生になったときにこの国際交流という講座をつくりまして、地域にいる外国籍の方との関わりを考えていってもらうようなきっかけになればいいなという形で設定をしたのが5番目になります。

6番目になりますが、鉢盛協力隊講座というものがあります。これは、山形村教育委員会とコラボをして、地域おこしにつながるガチャ、カプセルトイというんですかね、それを製作してまして、ちょっと今、実物を持ってきたんですが、お祭りのキャラクターを、うちわですけれども、こういうものをガチャにしていたりとか、あとこれは一番初めに山形村で出土した5種類の土器をミニチュアにして作ったものであるとか、あとは、これはJAの方ともコラボしているんですけれども、農産物の段ボールのミニチュアで、やまガチャ段ボールという名前なんですけれども、これも一緒に作ったりとかして、中にこういう説明書きですかね、これも教育委員会の方たちと協力しながら作って、詰めて販売をしたりとかしています。

次の7番目、金融教育講座なんですけど、これは後ほど三澤先生のお話にもちょっと出てくるかと思うんですけれども、生徒たちが地域おこし、地域を活性化させるために何かできないかということで、プレミアム商品券をつくったらどうかということで、生徒がこういう商品券を実はつくりました。それで、これを使う場所としてどうしようと考えたときに、学区内にあるお店ですね、お菓子屋さんであるとか商店にお声がけをして、依頼をして、賛同してくださったお店の方にアイシティに集まっていただいて、マルシェを開催しました。このチケット自体は1枚1,000円で売ったんですけれども、20万円ぐらいの売上げだったんですが、実際のアイシティのマルシェでは70万円ぐらい、これも含めてですね、売上げになりました。

した。ですので、生徒たちにとっては地域の活性化につながったんじゃないかなというふう  
に実感を持ってもらえるような機会になったのかなというふうを考えております。

このように、白峰タイムという3年生の授業なんですけど、地域の皆さんの温かさを感じた  
りとか、ふるさとのすばらしさを感じることができる、充実した活動の場となっております。

私がこういった授業を進める中で課題と感ずることというのを書かせていただいたんです  
が、さっきも説明があったように、私たちの学区は広大な畑であるとか、あと公園とか史跡  
とか美術館とか、とにかくたくさん施設が充実しています。さらに、複合施設というもの  
もこれから出てきたときに、そういった環境を生徒たちが自由に気軽に訪問できるような交  
通手段があるといいなというふうに感じております。地域では、本当に中学生の居場所の講  
座であるとかいろいろな企画をしてくださっているので、そういうものがあれば、より自由  
に生徒たちが参加して活性化につながるんじゃないかなというふうを考えております。

もう1点、人材の確保というのが、やっぱりどこの地域でも課題になってくるころだと思  
うんですけども、まずは学校と地域の連携がなぜ必要なのかであるとか、それによるメリ  
ットを明確にしていくことというのが、授業に関わってみて大事だなということは常々感  
じております。

次の、望む未来の姿のところにもつながるんですけども、卒業生であるとか地域の方な  
ど、とにかく鉢盛中学校のゆかりの皆さんが、いずれ何かお互いに助け合ったり協力してい  
けるような、鉢盛応援団みたいな、そういうものがおのずとできていけばいいなというふう  
に考えながら、ふだん業務をしております。

○学校長（藤松隆雄） ありがとうございます。

先ほど説明のありました、マルシェの協力をいただきました松本大学の三澤先生に続いて  
ご発表いただきます。お願いします。

○専門員（三澤秀樹） 松本大学地域づくり考房「ゆめ」、三澤秀樹と申します。ミサワと書  
いてサンサワと読みます。

今回、鉢盛中学校のから地域連携ということで相談がありまして、今ご紹介いただいた中  
の金融教育講座ですかね、ちょっと座って説明させていただきます。

最初に中学生から「地域経済を回すために地域通貨を活用したい」と相談があり、非常に  
驚きました。まずは、白峰タイムと書いてある資料を使用し、経済に対する考え方、品物の  
販売価格が地域の生産者、流通業者、消費者につながっていることを説明しました。調達、  
生産、流通、消費という過程で、生産、調達のみが地域内で行われ、流通、消費が都市部に  
流出すると資金が地域外に出てしまいます。そのため、地域内で経済の流れを回す点におい  
て、地域通貨は地域内限定で使用されるため、経済の自己循環を生み出すということを説明  
しました。

地域通貨には貨幣型と非貨幣的がありますが、中学生たちが検討した結果、分かりやすさ  
を重視してプレミアム商品券を選択しました。

以上を踏まえて、どのような仕組みを構築するかは、次のページでまとめています。

中学生に対し、国、自治体、地域通貨発行者の立場から地域通貨を考えること、リンゴの摘果作業の資金を元手にした仕組みについてを説明しました。

それを使ったので、どういうふうにするかというのがまたその次のページになると、こんな仕組みで、地域通貨（Happy）と書いてありますけれども、鉢盛ポイントの略でHappyと名前をつけたそうです。センスがあっていいなと思って見ていました。

最初は地域通貨を発行し、協力していただける地元の業者の中で、地域通貨を回すことを提案しましたが、中学生から、高校入試を控えている等の時間的制約や移動手段の問題があると反対がありました。そこで、アイシティに相談し、中央のイベント広場に仮想の市場を作り、学区内の店舗を集めることを提案しました。そこに地域の人たちが行くという形を取れば、同様の効果が期待できるのではないかと中学生たちに話しました。

中学生がデザインや約款作成などを苦勞して行い、業者向けのプレゼンを実施したところ、中学生の取組みに驚いた業者から協力の申し出をいただきました。地域住民も積極的に地域通貨を購入するなど、地域が学校を支援する体制の強さを実感しました。

このような経過で実現したのが、今回のマルシェです。マルシェと経済のつながりは見えにくいのですが、中学生たちには仮想市場がアイシティのイベント広場にあると話しました。

結果は先ほど数字の説明がありましたが、中学生が用意したお金は、リンゴの摘果作業の資金4万円分です。1,000円で1,200円分のプレミアム商品券を販売することで、24万円の地域通貨を発行し、流通させました。お釣り対応や地域通貨を持たない人の参加により現金売上も46万円発生し、合計70万円の市場規模となりました。中学生には、4万円の元手が最終的に70万円の経済効果を生み出し、地域活性化をもたらしたと説明しました。

今回のマルシェはポヌール・マルシェと名づけられました。ポヌールはフランス語で幸せを意味し、マルシェと合わせてフランス語で統一されていて工夫が凝らされた名称になりました。

この取組みの背景には、学校全体の楽しい雰囲気があると感じました。初めて校長室を訪れた際に、おもちゃ屋のようにガチャが並べられており、非常に楽しい学校だという印象を受けました。そのような学校の雰囲気が今回の中学生の積極的な取組にも表れていました。

マルシェ当日の中学生たちは、当初は緊張していましたが、お客さんとの接客を通じてコミュニケーション力を発揮し、終了時には大人と普通に会話ができるまでに成長していました。この1日でコミュニケーション力身についたと感じました。

「産学連携」による新たな学びの場の創出と中学生の変容という資料をご覧ください。

(2)の見られた生徒の成長・学びの変化については、先ほど説明したコミュニケーション力の面はもちろんですが、特筆すべきは、中学生はイベントの成功そのものよりも自分たちの

取組みが地域経済の活性化にどの程度寄与したかに強い関心がありました。

さらに注目すべき点は、参加者からのアンケート結果では、肯定的な意見が多い中、中学生が着目したのは否定的な意見でした。グループワークでも批判的な内容を中心に議論を展開し、次に向けた改善策を検討していました。会議の冒頭で教育長さんがお話しされていた教室の中で学ぶだけではなく、グローバル化社会で求められる、物事を考える、判断する、表現するという力が十分に発揮できていたと思います。

資料にもありますが、グループワーク等における先生たちのファシリテーション能力は秀でていました。次のステップに結びつく問いかけを投げかけ、生徒の主体的な学びを引き出していました。校長先生を始めとした教職員の方のご配慮があった結果、今回の取組みが成立したと感じました。

(3)にある地域連携と産学連携の展望ですが、大学での実践例から3つの主たる効果を挙げております。

1つ目はコミュニケーション力です。2つ目は思考・判断・表現を繰り返して、これまでに学んだことを線で結び直し、新たな知恵を生み出していく力が養われます。3つ目はグローバル化です。地域を題材とした学習はグローバル化社会に逆行しているのではないと言われることもありますが、グローバル化の捉え方は国際化とは異なり、言わば地域の固まりであり、地域のことを知らなければ他の地域のことは理解できないという考え方です。

大学でも同様の取組みを実施していますが、大切なことは地域へ出た際に地域の方と触れ合うことができるかです。触れ合いの中から困りごとなどの課題が出てきますが、鉢盛中学校で行っている摘果作業は良い触れ合いの機会です。今回の取組みを通じて私自身も色々と勉強させていただきました。ありがとうございました。

○学校長（藤松隆雄） 学校からは以上です。

○事務局長（赤羽志穂） ありがとうございました。

それでは、ここからの意見交換の進行は臥雲管理者にお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

○管理者（臥雲義尚） 鉢盛中学校の白峰タイムの具体的な取組について、藤松学校長、西山コーディネーター、三澤専門員からお話を伺いました。ある程度、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、初めて聞く話もあったかなと思いますが、山形村教育長職務代理者の平林委員はどのようにお話を伺って思ったのでしょうか。

○教育委員（平林昌廣） 具体的な取組をご紹介いただき、ありがとうございます。地域に開かれた学校づくりや取組を進めていく中で、私どもも鉢盛中学校の子どもたちをイベント等で見っていますが、こういうイベント等をつくっていくときの苦勞が報われたときの子どもたちを見ると、たくましく育っているなど常々思っています。そして、西山先生が、精力的に活躍されていて、本当にありがたいなと思っています。

3点ほどお聞きしたいのですが、まず1点目は鉢盛中学区もご多分に漏れず、少子高齢化

が非常に進んでいる地区で、学校と地域との連携においては、幾つか課題が見えてきているかなと感じています。先ほどご紹介があった囲碁クラブの事例に関連してですが、今後は学校も公民館等とも連携して活用されていく施設になるということも1つの見方だと思います。空き教室等のスペースを活用した際に地域住民、子どもたち、先生たちがそれぞれどのような関わり方をしていくのか、将来への見通しがあれば教えていただきたいです。

2点目は西山コーディネーターにお伺いしたいと思います。平成24年から山形小学校でも学校支援地域本部を立ち上げ、平成27年から学校運営協議会、コミュニティ・スクールを立ち上げていますが、大きな課題として支援ボランティアの高齢化と固定化があります。私どもが関わり始めたころは、60歳を超えた人たちに声をかければ数名は協力していただきましたが、今は65歳以上の人に声をかけても、働いている人もいるため、十年近くメンバーが固定化しており、若い人たちに数名入ってもらいカバーしているという状況です。このような課題に対して、どのようなお考えをお持ちか教えていただければありがたいです。

最後は三澤先生にお伺いしたいのですが、今回の金融教育においては、三澤先生の方で、中学生の発達段階プラスアルファのところで道筋を立てていただいたと思います。三澤先生から助言を頂きながら行った取組での、生徒たちの生き生きとした姿や地震に満ちた顔を見て、大変驚きました。

三澤先生が関わっていただいた経過や、大学と中学との連携について、そして行政として何か支援できることがあれば教えていただければと思います。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

3つのご質問と意見をいただきました。

まずは藤松学校長に、先ほど囲碁の例を出していただいてご説明いただいたんですが、これをさらにもっとこの分野を広げていく、そのためのスペースの問題とか人材問題とかはどのように感じているのかというご趣旨というふうには思いますが、いかがでしょうか。

○学校長（藤松隆雄） ご質問ありがとうございます。

未来像としては、学校を地域の方々が自由に使用するという事は、セキュリティーの問題等があるので少し難しい部分ではありますけれども、多くの皆さんが集まれる場になるといいなということが展望、未来像であります。そういうことをコミュニティ・スクール、運営委員会の際に私のほうでお話をさせていただいたところ、地域の方々から、実は囲碁クラブが行き場がなくて困っているというようなことで、使わせてもらえないだろうかという声を伺って、面談を重ねながら実行、10月からスタートしたということでもあります。

これを足がかりとして、囲碁の人が学校を使っているらしいよということをごんごん広げていっていただきたいです。地域の方が、自分たちも使いたいというふうになっていくとうれしいなということと同時に、最初に曾根原教育長もおっしゃいましたが、学校には多様な子供たちがいて、学校には来ているけれども、教室には入れないというようなお子さんもたくさんいます。学校には農園があって、子供たちがそこでリンゴを作ったり野菜を作

ったりしている。願わくば、山形、朝日、今井の農業のプロフェッショナルである方々が、一緒に農業をやって教えてくれる、あるいはほっとルーム、ステップルームという学級には入れないお子さんたちがいるけれども、その子たちと一緒に囲碁をやってみようかというような広がりであるとか、先ほど来お話をしているとおり、白峰タイムで、自分ならこういうことを企画できるけれども、一緒にやっついこうかというような形で、多様な子供たちが多様な活動に、地域の方々が自然に関われるような体制ができていくと、理想的だと思っています。そうすると誰かいないかと探していくことではなくて、そこにいる方々を活用していく、このような形になるとすてきだなというふうなことを思っているところで、具体的な取り組みとして、西山が毎月作成しているコミュニティ・スクールの新聞に、囲碁クラブのことを紹介させていただいて、地域の方々にももっと有効な活用方法はないですかということをお願いしたいと思っています。そのようなことで、今お話をしたようなコミュニティスペース化というものを目指しているというようなところであります。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

今、中学校部活の地域展開ということで、来年度、平日もということになってきますが、考え方によっては、地元のクラブの活動に子供たちも参加することが、地域クラブの一つとして囲碁という、今までの学校の部活動では種目としてなかったものに子供たちが関わる、放課後や休日に関わっていくということにつながっていく可能性もあると思って話を聞きました。先ほど農業ということにも触れられましたが、先日、JA松本ハイランドの皆さんとの意見交換の中でも、部活の地域展開ということ、農業、松本全体で見てもなかなか職業として子供たちが意識をする機会が少なくなっている中で、これも部活の地域展開の先にといいますか、その一つとして、農業クラブというものが農業が比較的盛んな地域ではできないかと。そのときにはJAとしても何らかの支援、関与していきたいというふうにおっしゃっていましたので、今の学校のコミュニティスペース化が開いていった先には、中学部活の新たな受皿としての展開をしていく可能性があることもお話しをされていました。

次に、西山さんには、先ほどボランティアの高齢化、固定化という問題があって、一方で、卒業した高校生とか大学生に関与してもらおうような、そうした動きも出てきたという中で、その高齢化、固定化の先にどういう展望を今後見ていくということで、何かお答えがあればご説明願えますか。

○コーディネーター（西山真由子） お願いします。

先ほど平林委員からお話があった点ですけれども、かつては鉢盛中学校も、小学校と同じようにボランティアというような形をお願いをしていたこともありましたが、今も地域の交通安全の見守りなどでは積極的に関わっていただいているところがあり、感謝申し上げたいところなんですけれども、実際に高齢化やボランティアというような立場の方をお願いをするというのは難しくなっているのかなと思っています。高齢者の方に対して、世の中の物価高騰の状況で無償でお願いすることは、こちらとしても心苦しいですし、実際に本当に

大変だからできませんとおっしゃる方も多いんです。ですので、ボランティアというよりはサポーターみたいな言い方に変えて、若い方たちにもできれば積極的に関わっていただきたいというふうに思っているところです。

小学校のほうは、恐らく放課後のクラブの関係で、より一層ボランティアという、いろいろ学校に協力してくださる方というのが必要だというふうに感じますが、中学校の場合は、例えば白峰タイムの講座などでお願いをすることはありますけれども、ボランティアという形ではなくて、大きい金額ではないですが、謝金をお出しするような形でお手伝いをいただいています。そのような形で臨機応変に、ボランティアで引き止めておくということは難しいと思うので、こちらの意識も変えながら対応していかななくてはいけないのかなというふうに感じております。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

必ずしも無償ということにこだわらないということでした。

もう1点、三澤さんに対して、先ほど企業協力の例に、大学との連携の事例をご紹介いただきましたが、さらに大学との連携を中学レベルで絡めていくとすれば、どういう課題や展望があるのでしょうか。

○専門員（三澤秀樹） そうですね、本講座に関わることになった経緯は、大学生が朝日村でビーツの収穫や商品開発に取り組んでおります。その関係を通じて、鉢盛中学校の先生と知り合う機会が生まれました。校長室に様々なおもちゃが置いてあることなど「面白い」と思い、やることを決めました。地域連携ということでは、小学校や中学校は地域や産業界と比較的密接な関係を築いているため、連携しやすい環境が整っています。しかし、単に取り組みを始めただけで終わってしまうケースも少なくありません。そこで、本講座では「コンセプトの明確化」や「効果的な実施方法」の助言をし、実際に中学校の先生方にも協力を得ながら、具体的な条件設定や実施手法の工夫を行いました。私自身は専門員としてコーディネーターの役割を担い、地域や産業界との橋渡しを行うことは、今後も実施できると考えております。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

それでは、続いて保護者の立場から清沢委員、これまでの発表や意見交換、どのように思っただらうか。

○教育委員（清沢郁恵） 頂いた資料にもありますけれども、主に1年生のネイチャーワークですとか、2年のワークショップ、キャリアアップチャレンジ、あと3年の白峰タイムと、1年生から3年生まで継続して地域との関わりがありまして、常に地域連携というのを積極的に推進していただいているという印象を持っています。西山先生をはじめ、担当の先生方、協力していただいている地域の方々には感謝しております。

また、こういった取組を、CSはちもり通信を発行していただいているので、保護者も自分の子供以外の学年の活動も知ることができています。ありがと

うございます。

取組の中でも、ご説明もありましたが、3年生の白峰タイムについて、今年はポヌールマルシェなど、画期的で工夫を凝らした取組をしていただいているという印象を持っています。今後についても引き続き積極的な取組を希望するわけではありますが、やはり子供たちのやってみたいとか知りたいというような思いを具体的にさせていただきながら、地域と関わって学べる機会をつくっていただければと思いますし、生徒と地域の人と一緒に市や村が元気になる活動が行われていければいいかなと思っています。

以上です。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

清沢委員から、子供たちが知りたい、やってみたいと思えるようなことを、さらに高めていきたいという趣旨のご発言があったと思いますが、子供たちの知りたい、やってみたいというものをどのようにすくい取って、この白峰タイムの内容に反映をされておられるのでしょうか。

○コーディネーター（西山真由子） 白峰タイムに関してですが、先ほどもちょっと説明しましたが、毎年絶対にあるものもございます。1年生や2年生は、3年生の活動の様子を普段から良く知っていて、文化祭のときに3年生が発表するので、自分は来年太鼓をやりたいとか、自分は福祉の関係に行きたいみたいな感じで、割にやりたいというものが決まっている子が多いです。なので、内容は決まってはくるのですが、実際に生徒からどういうことをやりたいのかということ聞いて、それで講座をつくるときに、こういうことができるかもしれない、こういうことができますと思いますみたいな感じで、限定はせずに提示をして、生徒たちが集まったところで、何をやろうかところでスタートするというのが一応基本になっています。

ですので、そのときに生徒がどういう意見を出すかによって、毎年若干内容が変わってきますが、生徒のやりたいことというのを特に注視をして展開するような形に心がけております。

○学校長（藤松隆雄） 補足をさせていただきます。

先ほど、JICAへ2年生のときに職場体験をしたということがありましたが、西山が過去にJICAに勤めていたという経験があって、JICAとの交流につながりました。本校は2年生の時に修学旅行を実施していますが、その際に、京都大学の留学生と一緒に行動し、グループ別で京都市内の見学を行ったところ、街中の至るところに多言語表記や注意喚起の掲示物があることを見て、山形村や朝日村でも外国籍の住民が多くいる状況を踏まえ、外国籍の人がごみの分別などで困らないように英語のパンフレットを作成しようということを今の3年生が考えました。最終的には、中国語、韓国語、英語に翻訳した山形村の観光マップを作成しましたが、2年生の活動の延長線上で、生徒たちのやりたいことや地域課題解決に向けた取組みに結び付けられています。3年生になってから白峰タイムで何を行うのか考え

るのではなく、1年生、2年生での経験を基に、3年生の白峰タイムでの実践に効果的に結び付けていきたいと考えております。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

これまでの発表やご意見を伺って、3人にご質問いただければと思いますが、曾根原教育長、鉢盛のこれからという部分でどのような感想をお持ちですか。

○教育長（曾根原好彦） まず、西山コーディネーターが学校に寄り添う活動をされていることがすばらしいなというふうに思いました。例えば、先ほどの先輩の姿を知ること、これは実はすごく大事で、先生は知っていますけれども、生徒は未知のものなので、憧れの先輩の姿を見ると、それが指標になって自分で学んでいきます。そういうものをつくってもらっているような話ですとか、様々な取組みにおいて、このコーディネーターとして位置づいている。

それから、マルシェも、長商デパートを長年やっていた長野商業高校の校長先生が三澤先生を招聘し、うまくきれいにまとまっていると感じました。校長の力は、アセスメントとマネジメント、ファシリテート、アセスメントで学校の状況をまず地域と一緒に把握する力が必要だということ。次、マネジメントは組織のマネジメントと、あと教育課程のマネジメント、もう1個重要なのがファシリテートという力が重要だと思っていて、いかに地域や関係者を校長がまず巻き込めるか、力が強いと言われていまして、そういう点で改めて鉢盛だけではなく松本市内のほかの学校においても、そういう力をつけられるようにしたいなと思いました。

一昨日、実は松本市内の公民館長と地域づくりセンター長が集まる会議で私もお話しさせていただいたのですけれども、いかにつながるかが大事で、できることとできないことを分けて、こんなことをやっていただきたいという話をしたのですけれども、鉢盛の学びがもっと広がるように努めていきたいなという感想を持ちました。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

大池委員、いかがでしょうか。

○教育長職務代理人（大池昌弘） 地域連携の価値というのを、子供側から見たときというのを少し感じるんですが、白峰タイムのふだんの活動を見せていただいたときに、あるグループで中心になって進めている子が、私の記憶では、なかなかその集団の中では自分の力が発揮できない、なかなか人との関係を調節するのが難しい、困難を抱えているというような子が、本当に中心になって、周りとの意見を交わしながらうれしそうに活動しているという姿を見て驚きました。

また、別のあるワークショップでは、公募で来た中学1年生が、やっぱり学校になかなか自分の居場所がない子であったなという記憶があって、それも非常に驚いたわけです。なぜ変わったのかと考えたときに、冒頭でありましたように、地域で自分は何かをしてみたいという、そういう意欲が高いということもあるのですが、それは地域に対して自分が価値を持

っている、価値を感じているからそういう状況になるわけであって、その価値を感じている根本は何かといったら、やはり自分以外の第三の大人というふうなところで、真剣に関わる中で自分はこんなに役に立つとか、自分はこんなことができるという実感を得たからじゃないかなというふうに考えました。

ですので、いわゆる自己効力感を得ていくのですけれども、やはりそういった自分だけでは感じられないもので、人にそれをしたときに人から返ってくる、リフレクションしてくるものを受け止めて、そして自分はこれでいいのだと思う、そういう過程だと思いますので、まさに自己肯定感を高めていくという活動が、この地域連携の活動としていろいろなことにひもづいていくことが言えるのではないかなと思います。

三澤先生もおっしゃってましたし、課題として西山コーディネーターも挙げていますが、そういう子たちは次は自分の番だという気持ちをきっと持ってくれるだろうと思いますので、行政としても、そのような場をどうやって今度しつらえていくかということを考えていかなきゃいけないかなというふうに思ったところであります。

以上です。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

では、百瀬委員。

○教育委員（百瀬司郎） お願いします。

実践の発表をお聞きして、大変すばらしい実践が築かれているなというふうにも実感しています。何年かこの職にあって鉢盛中学校を見ているわけですが、コロナのときに、先ほど曾根原教育長が言われたように、一旦このような学習が止まりましたが、その後の鉢盛中学校の地域に出ていく、あるいは地域を学ぶという学習に変容し、バージョンアップしていると感じています。

このような学習にまず先生方が関わってこようという動きがあるということが、今の鉢盛中学校のよきでもあるけれども、魅力がある題材を西山コーディネーターや校長先生がしつらえているということが大きいのではないかなと思いました。

この実践の中で3つのことを大事にしていきたいなということを感じました。1つ目は子供たちが実際の社会と触れ合う機会にしていきたいこと。現在鉢盛中学校はできていますが、疑似体験ではない、あるいは机上だけの体験ではない、そういう中で実際の社会や人に触れる、そのような学習が展開できていることが鉢盛中学校の魅力であると思います。学習フィールドというのは、学校だけではなくて、地域全体が学びのフィールドになるべきだというふうに私は思うわけですが、そのような意味で非常に魅力ある学習に展開できていると思いました。

2つ目ですが、子供たちにやらせる学習から、自分事にしていくまでの道のりを非常に大事にされていることです。自ら題材と関わる時間を大事にして、そして自分のことにしてから学習材を決めていく、あるいは学びの課題を決めていくこと。そして、調べて終わりにせ

ず、最後は表現や発信で終わっていくというこの学習のパターンが非常によく展開されているなというふうに思いました。

さきほど、地域の方に褒めてもらうというふうにありましたけれども、私も太鼓の練習の姿を見させていただくのですが、とても厳しい練習だと思いますが、それを絶対嫌だと言わないで取組み、難しい太鼓の楽曲を何曲も短時間の間に覚えていくことに感心するのですが、そのときに、お互いが注意し合うというか、先生に言われるのは当然だけれども、生徒同士で学び合うという姿が見られて、非常にいいなと思って見ております。白峰祭のときにステージから降りてくる子供たちの晴れやかな姿を見ると感動します。そういった意味で、マルシェにおいても、目標に着目していくという姿も、やはり自分事になっているからこそ着目しているわけで、褒められてよかったというだけではないなというふうに思ったわけでありませう。

3つ目ですが、生徒の学習を地域、自治体が支えていく体制の整備が必要になるのではないかというふうに思っています。広大な学区内を自由に子供たちが見学に行ける、あるいは人と触れ合う場所に行けるなど、そのような体制を自治体が整備し、支えていくことが必要ではないかと思えます。

朝日村では今年から、公民館で中学生の居場所をつくろうということを始めました。まだPRも十分ではなく、集まる子供も数人ですけれども、先ほどの部活動の地域展開も含めて、こういった受皿となる場所を、地域の人との交流を含めた場所としてつくっていくというようなものも、各自治体でつくっていくと、子供たちの活動の範囲が広がるのではないかと考えております。

いろいろなことを感じながらいるわけでありませうけれども、鉢盛中のこの展開というのは、そんなに多くの学校が簡単にできるようなことではないなと。そういった意味で、ある程度この鉢盛中の地域展開の学習というのは、一つのモデル的な出し方になっていくのかなというところを感じた次第であります。またいい展開になるのを期待しております。

以上です。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

私から2点、藤松校長にお伺いしたいことがございます。

1つは、地域という言葉、鉢盛中学校において地域と言うときの範囲ですね。それぞれ小学校の段階のときには山形村、朝日村、そして松本市の今井地区、これがそれぞれの地域ということ意識すると思えます。この組合立の鉢盛中学校は、3つの自治体とエリアがいわば地域と言っているのだと思えます。これは先ほど郷土愛を育むというお話がございましたが、この山形村、朝日村、松本市今井地区という、この1つのくくりというのは、鉢盛中学校の子供たちにとって、意識を強く持っているものでしょうか。それとも、やはり山形村、朝日村、今井というものが基本にはなるんでしょうか。

○学校長（藤松隆雄） ありがとうございます。

例えば、朝日太鼓をやっているお子さんが朝日村出身の子だけかということ、実はそうではありませんし、それぞれがメインになっている市町村があるわけですが、そこに限定というふうにはしていないわけではなから子供たちが横断していますので、山形の子が山形村ということではなくて、やっぱり鉢盛学区として愛着を持って、郷土、地域というふうに見ているというふうに我々は捉えています。

○管理者（臥雲義尚） 学区としての鉢盛中学校、これはもう少し掘り下げたときに、どういうアイデンティティーなのでしょう。人口的に学校が一緒になったというものを超えるという、60年も組合の歴史がありますので、おそらくそうした何らかの鉢盛中学校に通った子供たちだからこそのアイデンティティーがあるということですが、それは果たしてどういう言葉で表現されるようなものなのでしょう。そういうものがあることが、さらに郷土愛とか地域との連携というような言葉をより豊かなものにしていくには、一つ大事なポイントだなと思います。

○学校長（藤松隆雄） やはりこのような地域連携をする際に、地域の皆様方が鉢中のためなら何でも幾らでもやるよと、そういう答えが返ってくることが多いです。実はリンゴ摘果は40年以上続いているわけですが、リンゴ摘果の受入れ圃場の方とお話をしたときに、自分が中学校時代はこれをやったですとか、自分のときは2日間あって、大変だったというふうなことを農家の方々が楽しそうに話していました。鉢盛中学校の卒業生の皆さんが中核になって働いていらっしゃる。その意味では、やはり山形村とか朝日村とかじゃなく鉢中だと。これが1つキーワードなのかなというふうに思っています。

○管理者（臥雲義尚） 今の点で、曾根原教育長、松本市の今井地区の子供たちにとって、松本市の中学生だという意識と、この鉢盛中学校の中学生だという意識は、もしかすると重なり合い、また微妙な部分もあるのでしょうか。

○教育長（曾根原好彦） どっちとはっきり言えないですね。今井小に伺ったとき、今井小の子たちは、鉢盛に進学していくということは理解していましたが。

○管理者（臥雲義尚） 実際そういう違いにはなるということですね。

もう1点すみません。このような、自ら興味をどういうものに持つか、そしてそれに対して能動的に子供たちが探求的に学ぶというような学習の意義が大きくなっていく中で、そのベースとなるリサーチのようなものを、今の我々にとっては、例えば生成AIですが、中学の教育現場でも生成AI的なものと向き合うことに対しての効果とリスクみたいなものをどのようにお考えでしょうか。

○学校長（藤松隆雄） 学校としては、生成AIを活用しながらというところまではまだ行っていません。個々においては、もしかしたら活用しているかもしれませんが、そこまでしか把握していません。

○管理者（臥雲義尚） 西山さんはどのように考えますか。中学生段階でそういうものと向き合うことのプラス・マイナスについて。

○コーディネーター（西山真由子） 白峰タイムを例に取ると、中学生の時間の中では最後までできずに止まってしまうので、本当はもっと先まで行きたかったけれども、ここで終わってしまったということもあると思います。。もう少し行けるかもと思う子が、自分でどんどん進めていくというふうになっていくのが理想形なのかなと思っています。中学で終わりではなくて、さらに高校に行ってA Iなどを活用しながら更に深めるということは恐らく無限大にできると思うので、そういうことはありだと思いますし、もしそういうふうに中学校でできるのであれば、それはぜひ応援してやっていきたいなというふうに考えております。

○管理者（臥雲義尚） 曾根原教育長、どうぞ。

○教育長（曾根原好彦） 生成A Iの活用は、何も勉強しないでいくと、高校や大学で乱用して、いろいろなレポートとかをつくるようになると思うのですけれども、私が一つ勉強したのは、今年、今井小学校の6年生に対し、有識者が来て生成A Iについて学ぶ授業を実施するというので、私も見に行ったのですけれども、要するに生成A Iはどういうものかという仕組みと、いかにうそが混ざっているかとか、上手に使うためには何が必要かということ学ぶことを小学生でやっていたのですよね。これからは、うそも含まれていることをしっかり理解して、正しく使うにはそれ以前の前提となる条件をどれだけ自分がきちっと設定できるかとか、そういうことを早い段階から学ぶことが、うまく使えることにつながるということは感じました。

○管理者（臥雲義尚） 広く言えば、私はメディアだと思いますが、これだけメディアの形が変わり、なおかつリスクと背中合わせですけれども、極めて情報の入力幅が、深さが広がるものが私たちの身の回りに来たというこの状況を、教育現場や教育のカリキュラムで取り入れるようなことというのは、日本の場合、基本的にできていない。そうなると、使い方が分からなくて非常に危うくなる。近寄らないで、いずれ大人になったらというような両極端になってしまう。しかし、より大人の社会に触れるというような紹介していたようなアプローチもやっていく上では、そのベースとなるメディアリテラシーという部分を、小中学生の段階でどう学びの前提として取り入れていくかというのは非常に難しいですけれども、避けて通れないのではないかなと。改めて今回この大人と関わりながらやる行動が広がれば広がるほど、その興味関心のルートが広がっていきますので、今度はメディアのそうしたところから、どのように子供たちを守りながら、子供たちの背中を押していくということも考えていく必要があると思いました。

お時間、あと1分ほどありますが、これまでの意見交換などを踏まえて、さらにお感じになること、お考えになることがあったらご発言いただければと思います。

百瀬委員、いかがでしょうか。

○教育委員（百瀬司郎） 今のお話で感じていることですが、恐らくあと10年後は、当たり前のように子供たちの中に生成A Iが入っていくというふうに思います。そういった中で、仮想空間的な部分で、自分では経験しないけれども、仮想空間ではやれるかもしれない。

しかし、今日も話に出たけれども、本物の体験というのは、その子供たちにとってこれからも必ず宝物になるわけですね。そういった本物の体験、地域での体験、人との触れ合い、こういったことが子供たちの心の中にきちっと位置づいていくことが、そのふるさとを思う心を育み、あるいは自分の正しい道を歩んでいこうとする思いを育てていくことになるわけで、そういった意味では、鉢盛中学校のやっている地域の中での体験学習というのは非常に大事に展開するべきだなというふうに思いますね。判断力も含めて、そういったことで働いていく基になる、そんなふうに思います。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございます。

そのほかにいかがでしょうか。

ありがとうございます。

それでは最後に、藤松校長、今日は鉢盛中学校の取組をみんなで共有したという時間ですので、今後の学校の進むべき未来というふうなことで、最後によろしく願います。

○学校長（藤松隆雄） 皆様方、本日はたくさんのご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

今回、このような機会をいただくことを通して、今日の資料の作成やお話をさせていただくという経緯の中で、改めて本当に地域の皆様方にお助けいただきながら、お支えいただきながら学校というものが成り立っているということを再確認をさせていただいております。

先ほど来、百瀬委員さんも、本物の社会と触れ合うというようなところをお話しいただいていますが、なかなか子供たちが本物の社会にコミットさせていただくということは、地域の協力なしでは得られない。そこから得られる様々な教育効果というものを今日改めて再確認したところであります。

中学生が地域のために頑張っている、この白峰タイムの合い言葉は「ちいかつ」なんですよ。地域活性化ということですけども、中学生が地域を活性化させるため、まさに鉢中地域を活性化させるために頑張っている姿を地域の皆様方が見て評価をしてくださる。それで、地域の皆様方は、先ほどの百瀬委員もお話していただいたように、子供たちのために居場所をつくろう、今度は地域が中学校のために動いてくださる、そんなお互いが刺激し合いながら地域を活性化させていくような学校づくりを、これからも今日皆様方からいただいたご意見、ご感想等を大切にしながらつくってまいりたいと思います。今後とも何とぞご協力をよろしく願います。

本日はありがとうございました。

○管理者（臥雲義尚） ありがとうございました。

限られた時間でしたけれども、率直な意見交換を皆様と共にできたと思っております。ありがとうございました。

最後、事務局願います。

○事務局長（赤羽志穂） 本日予定しておりました議事は全て終わりました。

それぞれ有意義なご意見ありがとうございました。

本日の内容につきましては、議事録を公表するとともに、2月12日の組合議会2月定例会においても議員の皆様へ報告をしていく予定としておりますので、よろしくお願いいたします。

---

◎閉会の宣告

○事務局長（赤羽志穂） 以上をもちまして、令和7年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を閉じます。

ありがとうございました。

会議録調製職員 松本市・山形村・朝日村中学校組合 主任 三浦 佑太